

西之表市史編さんだより



中世部会

種子島氏と島津氏

新名 一仁 (中世島津氏研究者)

中世の種子島の叙述は、島主種子島氏が中心となります。江戸時代の種子島は薩摩藩に含まれ、種子島氏は島津家の“家臣”(一所持)という位置づけでしたが、中世における島津氏と種子島氏の関係は、主従関係ではありません。つまり「家臣」ではないのです。

種子島氏の出自については諸説ありますが、鎌倉期に大隅国守護を相伝した北条氏一族の守護代肥後氏の出身との説が有力です。そうした立場で種子島に入ったのなら、そもそも島津氏との接点はありません。種子島を含む大隅国の守護職を島津氏が相伝するようになるのは南北朝期に入ってからで、種子島氏との接点は15世紀に入ってからです。応永15年(1408)10月、肥後左近将監入道(種子島清時)は薩摩・大隅・日向三か国守護の島津元久から、屋久島・恵良部島を宛行われています。島津元久は、種子島氏に給地を与えて懐柔を図ったとみられますが、これは種子島氏が島津氏と主従関係をもった、つまり「家臣」になったことを意味しません。この頃の種子島氏は、島津分国内で「国衆」という身分に属していました。国衆とは非島津一族の独立した領主です。島津氏は守護という立場で、彼ら国衆を軍事動員する権限をもっていました。国衆は守護島津氏の命令に是々非々で対応していました。なお、種子島清時は、この時、島津元久と契状を取り交わし、相互扶助を約束しています。両者はあくまでも対等に近い関係でした。これが、戦国末に至ると、島津氏から正室を迎えるなど徐々に島津氏の権力内に取り込まれるようになっていきます。中世編では、両氏の関係がどのように変わっていくのか、明らかにしていく予定です。



応永15年10月8日 島津玄仲(元久)宛行状写

近世部会

種子島久照の知行地初入部について

山下 真一 (都城島津邸館長)

近世の種子島は薩摩藩の「私領」のひとつで、種子島氏は大名島津氏の家臣であり、かつ種子島を治める領主でもありました。種子島氏は、一時期知覧に移されたこともありましたが、ほぼ一貫して種子島を治めています。中世から種子島に居住し、近世種子島氏の家老を務めた上妻家に、寛政元年(1789)3月27日の日付が見られる種子島久照夫妻の「初地入」を迎えるための「次第書」が残っています。これに至る過程を「種子島家譜」から見ていくと、久照は、天明8年(1788)正月15日に父種子島久芳から家督を相続しました。相続後、父からの「領地である種子島に渡り、領内の様子を確認すべき」との指示に従い、同年9月に藩へ休暇を願い出て、同月15日に6ヶ月間の休暇を許され、同月28日に種子島を訪れています。種子島では赤尾木城に入り、連日家臣と面会、種子島家の菩提寺である本源寺や祈願寺である慈遠寺を参拝したり、領内をめぐったりしました。久照らは天候の関係から滞在期間を延長して、寛政元年4月18日に鹿児島へ戻っています。これらのことから、上妻家伝来の「次第書」は、種子島を訪れたすぐではなく、上妻家の屋敷へ迎えるためのものと思われます。

ところで、久照が家督相続時に領地である種子島を訪れるに際して、藩に休暇の許可を得ること、鹿児島へ「罷り帰る」と表現していることは注目されます。つまり、種子島氏にとって通常の拠点は鹿児島であり、領地である種子島へは藩から休暇をもらって訪れる場所であったということです。これは家臣の中で同様の立場であった都城島津氏が、通常の拠点を領地である都城としていたこととは異なっています。こうしたあり方は、種子島氏が藩の役人を担っていたこととも関連するのかも知れませんが、近世の領主制を考える上で重要であり、今後、市史を執筆していく中で明らかにしていきたいと考えています。



「上妻家文書」初地入次第書の冒頭

このたび、前田豊山先生関係の旧宅から、西村天囚博士との交信書簡(お宝)多数が発見されました。その一部をご紹介します。

西村天囚博士の母(浅子)から前田豊山に宛てた書簡

もうすでに使用されなくなった表現・語彙。異郷にあつて、望郷の念にかけられる老母の優しくも切ない思いが伝わってきます。

思いの外なる御無沙汰申し上げております。時彦(天囚のこと)が世界一周に参りました留守中に御親切なる手紙戴きましても御返事も差し上げず誠に御失礼のみいたしましたして御許し下されませ。今年首尾よく外国を一周して帰りまして安心致しました。先生も大元気の音を聞きまして嬉しく御座ります。なかなか寒くありますから世角(折角)先生並びに御祖母様大事になされませ。御孫様方も御琴様はじめ大きく御なり遊ばされる音を聞きまして、楽しみで御座います。軽少で御座いますけれども。かつをの魚の鰾粉を差し上げますから御飯の上になりにかけて御召し下されませ。私の志までで御座います。

豊山(デンヤマ・字名)のへりの附近の事を目に見る様に思ひやられて居ります。又明けましたならば暖かくなりますから、ひなたぶくりもめすよしに春めきて参りませう。

世角御身用心なされませ。私方も寒くて火鉢のはたのみであります。御目出度き正月を致しませう。

浅子

十二月二十九日
前田先生御夫婦様

資料紹介

西之表市立図書館長 鮫嶋 安豊

(概説)

朝日新聞社は明治四十三年世界一周(会費一九五〇円)を公募し、五十二名申込み挙行された。天囚は特派員として選抜された。天囚四十五歳の時である。この世界一周の最後の記事に「地球は果たして円き物なりけり。われら四月六日に日本を出てより、東へ東へと旅行して、此処に百四日目、七月十八日には、ゴツトリと日本に帰り来れり」と結んでいる。天囚のこの旅行の任務はこの一行に関する通信であった。ホワイトハウスでの大統領との引見記が面白い。「予も腰を押され、大統領の前に進みしに、大統領予が名を問う。その音声、頗る大、予が職業氏名を紹介すれば、何やら言いつつ、手を出されしより、予はそのいと大なる手を握力試験に遇いたる時の覚悟をもって、グット握れり。彼の逞しき手にはこたえざりしなるべし。予はジットその顔を見詰む。折しも、腰を押されてサツサと一方の出口より・・・」と。

前田豊山先生は

1831年前田紫州の長男として西之表中目に誕生。号を豊山。幕末から明治にかけ、種子島の子弟教育に尽力され、種子島の教育聖人として敬慕された。その子弟の代表格が西村天囚博士である。

西村天囚博士は

1865年西之表中目(現・鉄砲館の地)誕生。幼少の頃から豊山先生から王道教育を受ける。明治十七年十七歳東京帝国大学古典講習科官費生。明治二十二年大阪朝日新聞社入社。京都大学講師、宮内省御用掛等を歴任され、大正十三年五十九歳で永眠された。

国内最大規模ヘゴの個体群

寺田仁志（西之表市史自然部会長）

国上湊川には我が国の自然を代表する植物の群生が少なくとも2種あります。1つは昨年報告した太平洋岸北限のマングローブであり、もう1つが大田のヘゴ個体群です。

ヘゴは、地べたの高さにしかならないものが多いシダ植物の中では特異で、茎が木化して地上4mにもなるといわれています。その祖先は石炭にもなるほど大繁栄し、恐竜の時代以前から形も変わらず命を繋いできた植物で、生きた化石の1つといわれています。自生の北限地帯にあたる甑島や南大隅などの自生地は国の天然記念物にも指定されています。

湊川と溪流との分岐点（かつては小舟が上ってきた）から柳原の台地まで谷を縫って続く道路沿いでは、スギ林の中に多様なシダやクワズイモなどとともに1mを越えるヘゴを2千株以上見ることができ、谷の中には8mに達するものも記録されています。また、このヘゴは年間に20cm前後も伸びています。おそらく国内最大規模の個体群でしょう。何故ここに大きなヘゴがたくさん育っているのでしょうか。

それは大田の地形的な要因と信念を持ってスギを育ててくれた人物がいたからと言えるでしょう。



見事な景観をなすヘゴ

ヘゴは寒さと乾燥に弱い熱帯性の植物です。また、陽生植物で陽当たりが良くないと衰弱してしまいます。この地でヘゴの生える谷は北東から南西に走る丘陵の間で冬の季節風が遮られています。また、生えているスギ林の林床まで光が当たりヘゴなど地域の代表的な植物を保護するよう長年手入れを行ってきた方がいたからなのです。このことはヤブ蚊やスズメ

バチの襲来にもめげず多数の調査者が協力して行った市史の調査でわかったことで、本年度末に刊行予定の鹿児島県立博物館研究報告に掲載される予定です。

自然部会

ツチガエルとヌマガエル

池 俊人（鹿児島県立博物館主任学芸主事）

夜間になると島内のあちこちで、背中にイボのある大きなカエルを見かけた経験があると思います。これは、種子島で「イボバック」と呼ばれているニホンヒキガエルです。産卵期を除いて、県本土でこれほどたくさん見ることはないので、種子島で初めて多数のニホンヒキガエルを観察した時は、私も大変驚いたものです。この他にも、ニホンアマガエルやニホンアカガエル、ツチガエル、トノサマガエルなどの両生類が、種子島に生息しています。トノサマガエルも県レッドリストで準絶滅危惧に選定されるほど減少したカエルですが、種子島では比較的良好な姿を見かけます。



トノサマガエル

また、今回の調査では、島内各地でヌマガエルを確認することができました。

見た目はツチガエルに非常によく似ているので、慣れないと見分けるのは難しい

かもしれません。実はヌマガエルは2011年に発見されるまで、種子島からの記録がありませんでした。

おそらく、島外から人為的に侵入して、瞬く間に島内のほぼ全域に分布を広げたのでしょう。このように、



ヌマガエル

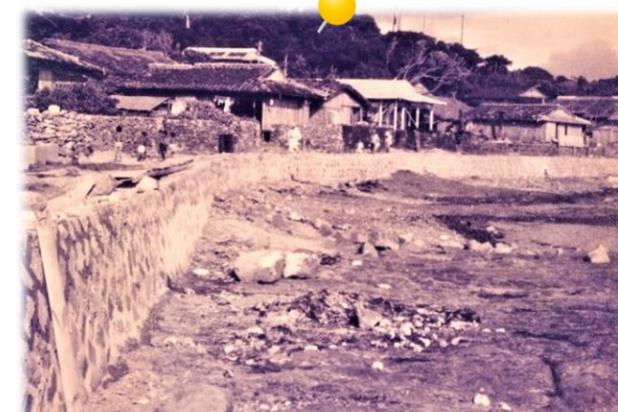
元々生息していなかった地域に人為的に侵入した生物のことを、外来種と呼びます。そして驚くことに、今回私が調査した場所では、ツチガエルを全く確認することができませんでした。外来種のヌマガエルが島内で分布を拡大したのに対し、在来種のツチガエルが激減してしまい、ツチガエルからヌマガエルへの入れ替わりが進んでいる恐れがあります。島内のどこかで、ツチガエルにも生き延びてほしいものです。

古資料・写真のご提供 ありがとうございます。

まだまだ募集しています！ご連絡ください！



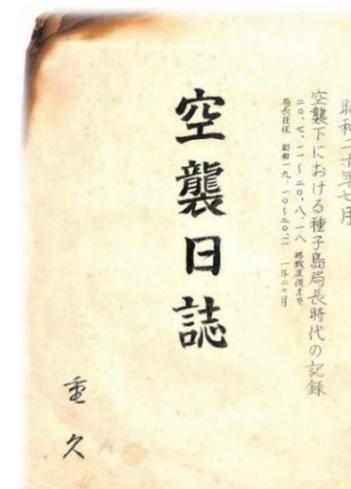
↑S17年 市民会館下の原っぱで（下村タミ子さん）



↑S30年以前の洲之崎の風景（中島明信さん）



↑S38年頃 大雪の鴻之峯小学校（前田秀夫さん）



←昭和20年7~8月の空襲日誌（構木容一郎さん）

今年度は、古写真、日記、古文書など500点を超える資料をご提供いただきました。

酒匂光江さん、番山博充さん、上妻文乃さん、平原朝男さん、石原仁さん、松本日出男さん、古賀写真館さんからも資料をご提供いただきました。ありがとうございました。

市史編さん事業の経過（12月以降）

- 12月13日 伊関本村 石塔調査
- 17日 伊関本村 戦争体験聞き取り調査
- 27日 市史編さんだより第7号発行
- 1月13日 現和武部 経塚調査
- 14日 榕城本立 田の神様調査
- 18日 自然部会地質調査
- 20日~25日 校区史部会開催
- 31日~2月2日 内城址発掘調査
- 2月5日 自然部会オンライン開催
- 10日 上西大花里 田の神様調査
- 17日 自然部会淡水貝調査

12月17日、伊関本村の故・榎本チヨさん（調査時100歳）に戦争体験を語っていただきました。空襲の際、又延の山に避難したこと、古田の兵隊さんにお米を届けた際に機銃掃射を受けたこと…。貴重な体験談をしっかりと後世に伝えていきたいと思っております。ありがとうございました。



1月14日、本立在住 清水英次さんに本立の田の神様を案内していただきました。情報提供ありがとうございました。